

# 「愚かなパンタカ」伝承考 (一)

## 関 稔

仏弟子のひとり「愚かなパンタカ」<sup>1)</sup>の物語は、愚の自覚のたいせつさや、暗愚鈍重の生きものにもさとりがあることなどを伝えて、凡俗のわれわれには特に興味深い。この人物に関する伝承は、かれ自身の遺偈と称されるものもあり<sup>2)</sup>、種々の仏典にいろいろなかたちで見出されるが、もっとも詳細なのは *Jātaka* 4 *Cullaseṭṭhi-j.*<sup>3)</sup>、『説一切有部毘奈耶』卷31—32<sup>4)</sup>、および『毘奈耶』の所伝とほとんどパラレルな *Divyāvadāna* 35 *C-ūḍāpakṣa-a.* である。

以下において、とりあえず *Divyāvadāna* 35の前半、パンタカの「現在世の物語」を、逐語的な愚訳で、『毘奈耶』の記述と対比させながら紹介する。

- 1) Skt.: *Cūḍapanthaka*; Pāli . *Cūḷapanthaka*, *Cullapanthaka*; 漢訳仏典では朱荼半託迦 (愚路), 周利槃特 (小路) などと訳される。パンタカ伝承の散在の様子は、赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』136—137頁「*Cūḷapanthaka*, *Cullapanthaka*」の項, 干潟龍祥『本生経類の思想史的研究附篇』35, 51—52, 92頁等参照。
- 2) Therag. 557—566. 中村元『仏弟子の告白』(岩波文庫) 124—125頁。
- 3) ed. V. Fausböll, vol. I, pp. 114—123. 中村元監修・補註, 藤田宏達訳『ジャータカ全集1』130—140頁。
- 4) 『大正蔵』23巻, 795頁上—803頁下。cf. *The Tibetan Tripitaka, Peking Edition*, vol. 43, 53.3.3—62.5.7.
- 5) (a) ed. E. B. Cowell and R. A. Neil, *The Divyāvadāna, a Collection of Early Buddhist Legends*, 1st ed. Cambridge 1886, repr. Amsterdam 1970, pp. 483—515.  
(b) ed. P. L. Vaidya, *Divyāvadāna*, BST 20, Darbhanga 1959, pp. 427

「愚かなパンタカ」伝承考（一）（関）

—445.

原典刊行は上記二種。*Divyāvadāna*の各説話と漢訳および蔵訳仏典等との対応については、K. Takahata, *Ratnamālāvadāna*, app. pp. 4-6, その研究・翻訳の状況については、岩本裕『改訂増補仏教説話研究序説』12—13, 135—164頁; H. Nakamura, *Indian Buddhism, a Survey with Bibliographical Notes*, p. 198等を参照。

*Divyāvadāna* (ed. P. L. Vaidya)

[427<sup>2</sup> - 434<sup>16</sup>] ブッダ・世尊はシュラーヴァスティー（舎衛城）のジェータ林・アナータピンダダの園（祇樹給孤独園）に滞在しておられた。シュラーヴァスティーにとあるバラモンが住んでいた。かれは同じ家系から妻を娶った。かれは、かの女と遊び、戯れ、ねんごろとなった。かれにこどもが次々に生まれて死んだ。のちに、かれの妻が〔また〕身ごもった。かれは手に頬を当ててももの思いにふけた。かれの近所に老婆が住んでいた。かの女を見た。かの女は言った。

「バラモンさん、なぜ、あなたは手に頬を当ててももの思いにふけているのですか」

かれは言った。

「わたしのこどもは、生まれるたびに、死んでしまった。いま、またわたしの妻が身ごもった。べつのこどもが生まれても、死ぬだろう」

かの女は言った。

「あなたの奥さまに出産のときがきたら、わたしを呼んでください」

のちに、かれの妻に出産のときがきた。かれは、その老婆を呼んだ。そ〔の老婆〕はか〔れの妻〕を出産させた。男の子が生まれた。そ〔の老婆〕はこどもを沐浴させ、白布でく

「説一切有部毘奈耶」卷31  
（『大正蔵』23卷）

[794下<sup>26</sup> - 798上<sup>22</sup>]

仏在室羅伐城逝多林給孤独園。於此城中有一婆羅門，娶妻之後，婦每生子，便即命終。後於異時，妻復有娠。時婆羅門知是事已，以手支頰，懷憂而坐。有鄰家老母，來至其所，告言「婆羅門，何故懷憂，支頰而住」答曰「我婦薄福。每所生子，便即命終。今復有娠。設生還死，寧得不憂」老母報曰「若至汝妻誕孕之日，當宜喚我」後時其妻至誕生日，即喚老母。母至婦所，見誕一男。老母取兒，淨澡浴已，持鮮白疊，周匝裹身，上妙生酥置於口內授與使女，告曰「汝可抱此孩兒安四衢大路。若見沙門婆羅門，行過之時，汝應慙重致敬告諸

るみ、生酥を口に含ませ、下女の手に渡した。  
その下女に言った。

「このこどもを大きな四辻に連れて行きなさい。バラモンでも沙門でも、出会うことがあれば、『このこどもが足下の礼をしています』と告げなさい。日が没して、もし〔こどもが〕生きていれば、連れ戻りなさい。そのとき死んでいれば、そのままそこに放置しなさい」

そ〔の下女〕は大きな四辻に行って立った。異教徒たちのつねであるが、〔人々が〕早朝に起き出して、沐浴場での水ごりのために出かけていた。その下女は、厳かに恭しく足下の礼をして、言った。

「このこどもが聖いかたがたに足下の礼をしています」

かれらは言った。

「長命であるように。長寿をたもつように。両親の願いを達成するように」

多くの長老の修行僧たちが、午前、下衣を着け、衣鉢をたずさえて、シュラーヴァステイーに行乞のために入った。その下女は、厳かに恭しく足下の礼をして、言った。

「このこどもが聖いかたがたに足下の礼をしています」

長老たちは言った。

「充分に長命であるように。長寿をたもつ

人言『此小孩兒礼聖者足』至日暮時，若命存者，即可持歸。若命不存，随处当棄，汝可歸還」是時使女，随教抱兒，往四衢大路，安在道辺。諸外道輩，於晨朝時，礼諸天廟，涉路而過。是時使女，遙見彼来，遂便致敬，指示孩兒，告言「聖者，此小孩子礼聖者足」彼呪願云「令汝孩子無病長寿天神擁護，父母所願悉令円満」復有衆多耆年苾芻，入室羅伐城，欲行乞食。亦從此過，使女見之，亦同前告白。時諸苾芻，如上呪願。

ように。両親の願いを達成するように」

世尊は、午前に、下衣を着け、衣鉢をたずさえて、シュラーヴァステイーに行乞のために入られた。その下女は、厳かに恭しく足下の礼をして、言った。

「世尊よ、このこどもが世尊に足下の礼をしています」

世尊は言われた。

「長命であるように。長寿をたもつように。両親の願いを達成するように」

日が暮れて、見ると、〔こどもは〕生きていた。かの女はそ〔のこども〕を連れて家に戻った。かの女はそ〔の家の人々〕に尋ねられた。

「こどもは生きていますか」

かの女は言った。

「生きています」

そ〔の家の人々〕は言った。

「どこへ連れて行ったのか」

「しかじかの大路 (mahāpatha) にです」

そ〔の家の人々〕は言った。

「こどもには、どんな名前をつけようか。このこどもは大路に連れて行かれた。こどもにはマハーパンタカ (Mahāpanthaka 大路) という名前をつけよう」

マハーパンタカ少年は、養い育てられ、大きくなった。かれは、大きくなって、文字

爾時世尊、於日初分、著衣持鉢、入室羅伐城、欲行乞食、亦從此過。時彼使女、見世尊来、慙重至心、五輪著地、礼世尊已、指示孩兒、合掌白仏「此小孩子礼世尊足」世尊告曰「令汝孩子無病長寿天神擁護、父母所願悉令円満」如是致敬、至日暮時、就觀孩子、見命尚存、抱兒歸舍。家人見問「孩子活不」報言「得活」又問「汝抱此兒、安在何処」報云「在大路傍」父母欣悦、便集宗親、為大宴樂、欲与孩兒施立名号。諸人議曰「今此孩子、初誕生已、置之大路。宜与此兒名為大路」此大路童子、由勝資養、身速長大。学諸芸能書算等技。広如上説。於婆羅門所有法式・著衣嗽食洗淨軌儀・

(lipi), 算数 (saṃkhyā), 計算 (gaṇanā), 印契 (mudrā), バラモンの威儀進退 (brāhmaṇikā īryā caryā), みそぎ (śauca), 行儀 (samudācara), 取灰 (bhasmagraha), アウトカラ (autkara), 呼びかけの方式 (bh-oskāra), リグヴェーダ (ṛgveda), ヤジュルヴェーダ (yaiurveda), サーマヴェーダ (sāmaveda), アタルヴァヴェーダ (atharvaveda), 供犠 (yajana)・供犠の執行 (yājana)・〔ヴェーダの〕学習 (adhyayana)・〔ヴェーダの〕教授 (adhyāpana)・布施 (dāna)・〔布施の〕受容 (pratigraha)を学び, 〔これらバラモンの〕六つの義務に専念するバラモンとなった。かれは五百人の集団にバラモンの義務としての〔聖音〕オーム (om) を唱えさせるようになった。

そ〔の父親〕は、さらに遊び、戯れ、ねんごろになって、妻は妊娠した。かの女に出産のときがきた。そこで、その老婆が〔428〕呼ばれた。かの女は出産させた。そ〔の妻〕に〔さらに〕男の子が生まれた。そ〔の老婆〕は、そのこどもを沐浴させ、白布でくるみ、生酥を口に含ませて、〔べつの〕下女の手に渡した。その下女は言いつけられた。

「おまえは、このこどもを大きな四辻に連れて行き、バラモンでも沙門でも、出会うことがあれば、『このこどもが足下の札をして

唱誦音声、咸尽其妙。善四明論，解六作業，具大智慧。有五百童子，就其受学。

時婆羅門不能離欲。

【如有説云『若人渴逼，便飲鹹水，渴更增多。如貪姪者，習欲之時，貪更增長』】婆羅門染欲不捨。婦更有娠。將誕之時，還命老母。其母至已，看其誕孕，見産一男。還復同前，淨洗浴已，裹以白疊，授与使女，告云「可持此

います』と告げなさい。日が没して、もし〔こどもが〕生きていれば、連れ戻りなさい。そのとき死んでいれば、そのままそこに放置しなさい」

その下女は、生まれつき怠惰で、小路にじっとしていた。異教徒たちのつねであるが、〔人々が〕早朝に起き出して、沐浴場での水ごりに出かけていた。その下女は、厳かに恭しく足下の礼をして、言った。

「聖いかた〔がた〕、このこどもが聖いかたがたに足下の礼をしています」

かれらは言った。

「長命であるように。長寿をたもつように。両親の願いを達成するように」

日が暮れて、かの女がそ〔のこども〕を見ると、生きていた。かの女はそ〔のこども〕を連れて家に戻った。かの女はそ〔の家の人々〕に尋ねられた。

「こどもは生きていますか」

「生きています」

そ〔の家の人々〕は言った。

「このこどもをどこへ連れて行ったのか」  
かの女は言った。

「しかじかの小路（panthalikā）にです」

そ〔の家の人々〕は言った。

「こどもにはどんな名前をつけようか。このこどもは小路に連れて行かれた。こどもに

子、安大道辺」如前教示。時彼使女、稟性懶惰、便抱孩子、置小路辺、見有沙門婆羅門外道内道及以大師、同前指示。皆為呪願。広説如上。至日暮時、孩兒存活、抱兒歸舍。父母歡喜、問使女曰「汝抱此兒、安在何処」

報云「安小路傍」父母即便広設大会、与子立命。皆云「此兒、欲求長命、置小路傍。應与此兒名為小路」既漸長大、令其受学。其師先教誦悉談章、稟性愚鈍、道談忘悉、道悉忘談。時親教師、報其父曰「我昔曾教衆多童子、未曾見此愚鈍小兒。大路童子、少授之時、多所領解。然此童子、道悉忘談、道談忘悉。我実不能教其学問」

父聞語已、便作是念『非一切婆羅門皆有文

はパンタカ（panthaka [小] 路）という名前をつけよう」

パンタカ少年は、養い育てられ、大きくなった。かれは、大きくなって、文字を学んだ。かれに、シ（si）と言って〔教えても、つぎの〕ダ（dha）というのを忘れてしまうのだった。そこで、かれの師匠は言った。

「バラモンよ、わたしは、大勢のこどもたちを教えなければならない。わたしはパンタカを教えることができない。〔兄の〕マハーパンタカは、少しを言えば多くをつかんだ。しかし、このパンタカは、シと言え、ダを忘れてしまう」〔父親の〕バラモンは考えた。

『すべてのバラモンが文字に精通しているわけではない。こ〔のこども〕はヴェーダ〔に精通する〕バラモンになるのがよかろう』と。

そ〔の父親〕は、ヴェーダを学習させるために、かれ〔パンタカ〕を、〔べつの〕教師に預けた。かれは、オーム（om）と言うとブー（bhū）を忘れ、ブー（bhū）と言うとオーム（om）を忘れるのだった。教師は言った。

「わたしは大勢のバラモンの若者を教えなければならない。わたしはパンタカを教えることができない。この者は、オームと言え、ブーを忘れ、ブーと言え、オームを忘れる」

〔父親の〕バラモンは考えた。『すべてのバラモンがヴェーダに精通しているわけでは

学。宜可教其闇誦明論』  
将付明師，令教誦業。

師乃教誦明論，道蓬忘瓮，道瓮忘蓬。是時，  
彼師告其父曰「我昔曾  
教衆多童子，未曾見此  
愚鈍小兒。道蓬忘瓮，

道瓮忘蓬。我实不能教  
其誦習」時婆羅門聞斯  
語已，復作是念『非一

切婆羅門皆能誦習。但  
作種姓婆羅門，自然得  
活，亦何事辛苦』由此

童子稟性愚鈍，時人皆  
悉喚為愚路。父於愚路  
偏鐘愛念，有請召処，

必将随逐。後於異時，  
父婆羅門，身嬰重病，  
雖加医薬，漸就衰羸，

告大路曰「我歿世後，  
汝無憂慮。然愚路無識，

爾勿見輕。安危共同，  
始終相濟，尽兄弟義，  
当憶吾語。如仏言曰

『積聚皆銷散

崇高必墮落

会合終別離



ない。こ〔のこども〕は、せめて、生まれによるバラモン（jātibrāhmaṇa）となるのがよからう』と。

そ〔の父親〕は、どこへ招かれて行くにもそのパンタカを連れて行った。さて、そこで、その〔父親である〕バラモンが病気になった。かれは、根・茎・葉・果実などの薬物で看護されたが、衰弱した。かれは、かのマハーパンタカに言った。

「息子よ、わたしの死後も、おまえは心配がない。おまえは〔弟の〕パンタカを助けてやるのだぞ」

[そこで] 次のように言われるが、

『すべての集積は離散におわり、上昇は落下に帰す。

出会いは別れにおわり、生は死に帰す』<sup>1)</sup>  
という次第で、かれは亡くなった。そ〔の家の人々〕は青・黄・赤・白の布で棺台を飾り、大いに敬意をはらって、かれを火葬場で荼毘に付し、悲しみをうちはらった。

尊者シャーリプトラ（舍利弗）とマウドガリヤーヤナ（目連）が、五百人の従者を従えてコーサラ（憍薩羅）国を遊行し、シュラーヴァステイーに到着した。シュラーヴァステイーでは、大勢の人々が、尊者シャーリプトラとマウドガリヤーヤナがコーサラ国を遊行してシュラーヴァステイーに到着した、とい

有命咸歸死』<sup>1)</sup>

說是語已，即便命終。  
二子悲号，具弃凶礼，  
送至林所，焚烧既訖，  
懷憂而歸。

是時舍利子及大目連，  
与五百苾芻，詣憍薩羅  
国，人間遊行，至室羅  
伐城。城中人衆，聞舍利  
子及大目連与五百苾芻  
欲来至此，出城迎接。  
爾時大路，於此城外，

うことを聞いた。その大勢の人々は、聞いて、  
〔都の〕外へ出て行き始めた。

さて、マハーパンタカは、シュラーヴァステイー〔城〕外の、とある樹木の根もとで、  
〔429〕五百人のバラモンの若者にバラモンの  
聖句（mantra）を暗誦させていた。かれは、  
その大勢の人々がシュラーヴァステイーから  
出て行くのを見た。かれは、そのバラモンの  
若者たちに尋ねた。

「諸君、出て行くこの大勢の人々は何者な  
のか」

そ〔のバラモンの若者たち〕は、かれに言  
った。

「先生、大徳シャーリプトラとマウドガリ  
ヤーヤナが、五百人の従者を従えてコーサラ  
国を遊行し、ここシュラーヴァステイーに到  
着したので、かれに会うために出かけている  
のです」

「いま、どうして、あのふたりに会う必要  
があるのか。最高の種姓〔バラモン〕を捨て、  
第二の種姓〔クシャトリヤ〕に属する沙門で  
あるガウタマのもとで出家したものを」

そこに、〔ブッダの数えに〕浄信をいただく  
ひとりのバラモンの若者がいた。かれは言っ  
た。

「先生、そのようにおっしゃってはなりま  
せん。あのふたりには大いなる威徳がありま

在一樹下、領五百人、  
授其学業、見諸大衆俱  
共出城、問学徒曰「今  
此人衆、欲何処去」学  
徒報曰「此諸人衆、聞  
舍利子及大目連与五百  
苾芻欲来至此、共出迎  
候」大路問曰「彼二人  
者、有何可觀。我昔聞  
『彼俱棄最上婆羅門種、  
於第二族刹帝利種沙門  
喬答摩處、而為出家』  
何足迎也」彼門人中、  
有摩納縛迦、崇重三宝、  
前白師曰「大師、勿作  
是語。彼獲聖果、有大  
威神。若大師聞彼說法、  
必当随從而求出家」時  
諸学徒、每於假日、或  
觀城市、或往仙渠、或  
採祠薪、或礼天廟。後  
因休仮、学徒出行。大  
路念曰『摩納縛迦称讚  
仏法。我今宣可竊往聽  
之』便出城外、見一苾  
芻樹下經行、往詣其所、  
告言「苾芻、世尊妙法、

す。もし、先生がその教えを聞かれるならば、先生も満足されるところがありましょう」

そのバラモンの若者たちのつねとして、学習が休みになると、あるときは都の見物に出かけ、あるときは沐浴場での水ごりに出かけ、あるときは〔祭壇用の〕焚き木を採りに出かけた。後日、かれら全員、学習が休みになることがあった。かれらは焚き木を採りに行った。さて、かれマハーパンタカも、散策していて、とある樹木の根もとに立ちどまった。そこで、ひとりの修行僧を見かけた。かれは、そ〔の修行僧〕に近づいて、次のように言った。

「さあ、修行僧よ、なにかブツダのことばを聞かせてください」

その修行僧は、かれにたいし、十種の善い行い（十善業道）を詳しく説明した。かれは信心をいだいて、言った。

「さあ、修行僧よ、〔いずれ〕また詳しく話してください」と言って、歩み〔去った。〕

その後さらに、かれらは学習が休みになることがあった。かれらは焚き木を採りに行った。マハーパンタカは、くだんの修行僧のところへ行った。そ〔の修行僧〕は、かれ〔マハーパンタカ〕にたいし、順逆〔の見方〕がある十二支縁起を詳しく説明した。かれは信心をいだいて、言った。

為説多少」時彼苾芻、即為広説十悪業道十善果報。大路聞已、心生敬信、告言「苾芻、我当不久還更重来」遂捨而去。於後假日、重詣彼苾芻所、還請説法。苾芻即為広説十二縁生。彼既聞已、倍生深信、白言「聖者、我頗得於善説法律而為出家、在如来所、修梵行不」時彼苾芻作如是念『我今宜可許其出家、令駕法轅、令持法炬』告婆羅門曰「随汝意樂」婆羅門曰「我於此处衆所知識、不能出家。当詣他方為出家事」苾芻遂即将向余処、而与出家、并授円具、告言「具寿、如仏所説、有二種業。一者誦誦、二者禅思。於此二中、汝樂何事」答曰「鄔波駄耶、二種俱作」便於昼日、誦誦衆經、未久之間、善閑

「さあ、修行僧よ、できればわたしは、善く説かれた教え（法）ときまり（律）を奉じて出家し、完全な修行僧としてのありかたを実践し、沙門ガウタマのもとで清浄な生活をしたいのですが」

その修行僧は考えた。『わたしが出家させてやることにしよう。かれは、教説という重荷をになうだろう』と。

そ〔の修行僧〕は、かれに言った。

「バラモンよ、そうしなさい」

マハーパンタカは言った。

「修行僧よ、われわれはよく知られたバラモンです。このまま、ここで、出家するわけにはいきません。地方へ行って出家したいと思います」

そ〔の修行僧〕は、かれを地方へ連れて行き、戒を授けて、言った。

「二種類の修行僧の実践がある。静慮(dhyāna)と学習(adhyayana)とである。きみは、どちらを行うか」

「わたしは両方とも行います」

かれは、日中は三蔵に関説し、完全に修得し、夜分は思考し熟慮し思惟し、すべての煩惱を除滅して、聖者の最高位を証得した。最高位の聖者（阿羅漢）となり、三界の欲望を捨て、土塊と黄金を同じものと見なし、虚空と掌とに平等なところをいだき、斧と栴檀は

三蔵。於初後夜、觀察思惟。斷諸煩惱，證阿羅漢，三明六通，具八解脫，得如實知『我生已盡，梵行已立，所作已弁，不受後有』心無障礙，如手搗空。刀割香塗，愛憎不起。觀金与土，等無有異。於諸名利，無不棄捨。積梵諸天悉皆恭敬。爾時大路，既得果已，便自生念『我比誦誦，勤苦思惟，所應得者，今已獲得。我今宜往室羅伐城，礼世尊足，承事供養』遂与五百門徒，執持衣鉢，漸次遊歷，至室羅伐城。時此城人聞「具壽大路，将五百人，從憍薩羅，人間遊行，欲來至此」時諸大衆，咸皆出迎。

同様であると考えて〔すべてに平等平静な気持をいただくようになった。〕宇宙をひき裂くような知識をもち、知識と神通力と障りのない理解表現力を獲得し、現世の利得と貪欲と名誉に背を向け、インドラ神を初めとする神々に尊敬され、供養され、敬礼されるべき者となった。

〔弟〕パンタカの財産が減少し、消失し、枯渴したが、そのとき、かれは困苦して生計をたて始めていた。そこで、パンタカは次のように思った。『わたしにも、〔ブッダの教えを〕聞くことで、得られるものがあるはずだ。わたしは〔それを得なければならない。〕シュラーヴァステイーへ行って、世尊に仕えることにしよう』と。

さて、〔兄の〕尊者マハーパンタカが五百人を従えてシュラーヴァステイーに向かって遊行した。次々に遊行して、シュラーヴァステイーに到着した。シュラーヴァステイーの大勢の人々が、聖いマハーパンタカが五百人を従えてコーサラ国を遊行してシュラーヴァステイーに到着した、ということを知った。聞いて、〔都の〕外へ出て行き始めた。パンタカは〔その大勢の人々を〕見た。かれは尋ねた。

「みなさん、こんなに大勢の人々が、どこへ行くのですか」

時彼愚路、与兄別後、家業日衰、遂至貧窮、乞求活命、見衆人出、問曰「何意諸君俱出城郭」諸人報曰「聖者大路、与五百人、從憍薩羅、今來至此。是故、諸人出城迎接」愚路聞已、作如是念『此諸人等、非彼兄弟、亦非宗親、尚出相迎。我是其弟、因何不去』即隨俱出、与兄相見。兄慰問曰「愚路、与汝久別、若為存養」答曰「辛苦為活」問曰「何不出家」答曰「我既至愚至鈍、誰肯教我出家」大路便念『不知此弟有善根不』因即觀察、見有善根。

かれらは言った。

「聖いマハーパンタカが五百人を従えてコーサラ〔430〕国を遊行し、シュラーヴァステイーに到着しました。この大勢の人々は、かれに会うために出かけています」

パンタカは考えた。『あ〔のマハーパンタカ〕は、この人たちの兄弟でも親族でもない。かれは、わたしの兄である。わたしは、どうして、かれに会いに行かないのか』と。そこでかれも、そ〔のマハーパンタカ〕に会いに出かけた。かれは、会い、尋ねられた。

「パンタカよ、どのようにして暮らしているのか」

「困苦して暮らしています」

「どうして、出家しないのか」

かれは言った。

「わたしは愚かなのです、この上なく愚かなのです。鈍いのです、この上なく鈍いのです。〔そのような〕わたしを、だれが出家させてくれるでしょうか」

尊者マハーパンタカは考えた。『かれに、なにか善い報いをもたらす業因（善根）があるだろうか。〔その業因は〕ある。この者がどうして、〔出家に〕相応しくないのか』と。

「さあ、わたしがおまえを出家させてあげよう」かれは、出家させ、完全な戒を授けた。かれは、そ〔の弟パンタカ〕に簡単な〔詩の〕

『雖有善根, 与誰相属』  
観知属己, 告言「可来,  
与汝出家」 答曰「善  
哉」 便与出家, 并授  
円具, 授一伽他, 令勤  
習誦。

『身語意業不造悪  
不恼世間諸有情  
正念観知欲境空  
無益之苦当遠離』<sup>2)</sup>

教え（uddeśa）を授けた。

『こころによって、ことばによって、身体によって、あらゆる世界で、いかなる悪をもなすべきではない。

諸欲を離れ、正しく思念し、正しく観察するならば、そのような人は、不利益をとまなう苦しみを見出すことがない』<sup>21</sup>

かれには、この詩が、三カ月たっても、唱えられるようにならなかった。ほかの牛飼いや家畜番たちには、聞いて、うまく唱えられるようになったものである。〔パンタカは〕厳かに恭しく近づいて、尋ねてみた。かれらは〔その詩を〕唱えた。

ところで、きまりとして、諸ブッダ・世尊には二つの弟子たちの会合があって、〔一つは〕アーシャーダ月の雨季の定住生活の第一日目に、〔他の一つは〕カールッティカ月の満月の日に〔もたれる。〕同じく、〔いまのブッダの〕偉大な弟子たちにも〔二つの会合があった。〕そこで、アーシャーダ月の雨季の定住生活の第一日目に集まって来て、かれらは、それぞれの個別の考えにそって、それぞれの村・町・領地・王城で雨季の定住生活に入る。そして、カールッティカの満月の日に集まってきて、学習の課題や要請したり、習得したところを報告したりするのである。

尊者マハーパンタカと生活を共にする弟子

爾時愚路，誦此伽他，  
雖經三月，不能誦得。  
有諸牧人，聞其誦聲，  
悉皆聞得。是時愚路，  
起恭敬心，詣牧人處，  
請授伽他。彼便為說。  
然諸仏常法，於二時中，  
聲聞弟子，悉皆普集。  
一謂五月十五日欲安居  
時，二謂八月十五日隨  
意之時。若於初集來者，  
各於師所，受其學業，  
所謂思惟誦誦，既授得  
已，便於城邑聚落，而  
作安居。若後集來者，  
試曾授經，更請新業，  
有所證悟，皆悉白知。  
時具壽大路所有弟子門  
人，各隨處安居已，至  
後集時，詣大路所，試

である修行僧たちは、地方で雨季の定住生活に入っていたが、その者たちも、カールッティカの満月の日に、尊者マハーパンタカのところに来てきた。そこで、ある者たちは学習の課題を要請し、ある者たちは質疑をおこない、ある者たちは習得したところを報告した。

〔一方、〕そこに、愚かな、この上なく愚かな者たち、鈍く、この上なく鈍い者たちがいて、かれらは六人組〔の悪行の修行僧たち〕に仕え、親しみ、従った。尊者パンタカは、六人組に仕え、親しみ、従った。かれは六人組に言われた。

「尊者パンタカよ、おまえと同学の者たちは、和尚のところ、学習の課題や質疑を要請している。さあ、おまえも、おまえの和尚のところ、学習の課題や質疑を要請してきなさい」

かれは言った。

「わたしは、なにも学びませんでした。三カ月のあいだに、一つの詩さえ、わたしには、唱えられるようになりませんでした。どうして、わたしが、学習の課題を要請することができますか」

かれらは言った。

「『学習しないでいる者たちは、酪酊している』と世尊が言われたではないか。どうし

曾受経、更請新業、有所證悟、皆悉白知。若愚鈍者、於六衆邊、共相承事。爾時愚路亦近六衆。六衆告曰「愚路、汝之同学、各向師所、請受學業。汝何不去請新業耶」答曰「我於三月、誦一伽他、尚不能得、何復求新」六衆告曰「具壽、可不聞說『所受之業、若不習者、日增生波』豈有不誦得伽他耶。汝今宜可求教授者」是時愚路、見苦勸進、便往到彼親教師邊、白言「大師、幸願授我教授之人」大路聞已、作如是念『為是愚路自發此心、為是傍人共相激發』又更觀察、見被他人之所勸獎。復觀愚路『為因勸讚方能受化。為因呵責堪化度耶』觀由呵責方能受化、遂乃手扼其項、推令出房、責曰「汝是至愚極愚至



て、学習しないでおまえに、詩がうまく唱えられるようになるだろうか。さあ、要請してきなさい」

かれは、行って、〔和尚である兄パンタカに〕言った。

「和尚さん、学習の課題をわたしに授けてください」

尊者マハーパンタカは考えた。

「この者に、このような自信があったのか。それとも、だれかに勧められたものか」

かれは、〔弟パンタカが〕勧められたのであることを、見てとった。

尊者マハーパンタカは考えた。『この者は激励によって指導すべき者なのか、それとも、叱責によって指導すべき者なのか』と。かれの見るところ、〔弟は〕叱責によって指導すべき者であった。かれは、そ〔の兄マハーパンタカ〕によって、首をつかまえ〔られ〕て、僧院の外へ放逐された。

「おまえは、ほんとうに、愚かであり、この上なく愚かである。鈍く、この上なく鈍い。おまえは、この教えを奉じて、なにをしようというのか」

かれは泣き始めた。

「いまや、わたしは〔431〕在家でもなく、出家でもない」

世尊は、尊者パンタカが僧房の外にいるの

鈍極鈍。汝於仏教，欲何所為」是時愚路，乃於房外，泣淚交胸，而長歎曰「我非在俗，復非出家。今受艱辛，欲何控告」

〔世尊常法，於時時

を見られた。見て、再び〔近くに〕来たときに、言われた。

「パンタカよ、どうして、そなたは僧房の外で泣いているのか。涙を流しているのか」

「尊師よ、わたしは和尚〔である兄〕に放逐されました。いまや、わたしは在家でもなく、出家でもないのです」世尊は言われた。

「親愛なる者よ、この偉大な賢者(ブツダ)の教えは、そなたの和尚〔である兄パンタカ〕が、三無数劫〔の長き〕にわたり、無量百千の困難によって、六つの完全な行為(六波羅蜜)を成就して獲得したものではない。そうではなくて、この偉大な賢者の教えは、わたくしが、三無数劫にわたり、無量百千の困難によって、六つの完全な行為を成就して獲得したのである。そなたは、如来〔であるわたくし〕のもとで学ぶつもりはないか」

「尊師よ、わたしは愚かで、この上なく愚かなのです。鈍く、この上なく鈍いのです」

そこで、世尊はこの機会に〔次のような〕詩を唱えられた。

『愚者は愚者であること〔の自覚〕によって、そこで賢者となる。

愚かにも〔自らを〕賢者であると考える者、そのような者こそ、ここでは、まことの愚者と言われる<sup>3)</sup>』

諸ブツダ・世尊が逐語的に教えを説かれ

中、或遊山澗、或遊林藪、或往屍林、或遊於寺。〕爾時世尊、有因緣故、往大路房、到已、便見愚路房外悲啼、問曰「汝今何意、房外悲啼」白言「世尊、我性愚鈍、無聰慧力。被親教師驅出房外、既非居俗、復非出家。今受艱辛、無控告處」世尊告曰「理不如是。牟尼聖教、非是汝師於三無數大劫備受無量百千苦行円満修成六到彼岸之所持來。然此聖教、但是我於長時具修万行而自持來。汝頗能於我辺親受誦不」爾時愚路白仏言「世尊、我既至愚極愚至鈍極鈍、云何能得於大師所親受學業」爾時世尊、伽他告曰

『愚人自説愚  
此名為智者  
愚者妄稱智  
此謂真愚癡』<sup>3)</sup>

るだろう〔と考えるのは〕不適切である。このようなことはりはない。

そこで、世尊は、尊者アーナンダ（阿難）告げられた。

「アーナンダよ、そなたが、このパンタカを教授しなさい」

尊者アーナンダは、かれに教授し始めた。かれは教授することができなかつた。尊者アーナンダは世尊に次のように申しあげた。

「尊師よ、わたしは師に奉仕しなければなりません。説かれたものを習得しなければなりません。大勢の者たちに学習させなければなりません。次々にやって来るバラモンや家長たちに教えを示さなければなりません。わたしはパンタカを教授することができません」

世尊は、かれ〔パンタカ〕に、『わたしは塵をとり除く (rajo harāmi)』『わたしは垢をとり除く (malaṃ harāmi)』という二つの句を授けられた。かれは、この二句を会得しなかつた。世尊は考えられた。『この者にあつては、行為の除去がなされねばならない』と。そこで、世尊はパンタカに\*告げられた。

「パンタカよ、そなたは、修行僧たちのサンダルを徹底的に掃除することができるか」

「尊師よ、いくらでも、わたしはできます」

「さあ、掃除しなさい」

かれは、修行僧たちのサンダルを徹底的に

然仏世尊於受学者 親  
教句字、無有是処。

爾時仏告阿難「汝  
可教授愚路」時阿難陀

「唯然」受勅、教其誦  
誦。而彼不能受持學業。

時阿難陀、往詣仏所、  
礼雙足已、在一面立、

白仏言「世尊、我既親  
侍大師、受持法藏、指

搗徒衆婆羅門等、為其  
說法、而我無容得教愚

路」爾時世尊、便喚愚  
路、授兩句法『我払塵、

我除垢』。此亦不能隨  
言記憶。世尊見已、知

其障重、教令除滅、告  
愚路曰「汝能与諸苾芻

払拭鞋履不」白仏言「能」  
「汝今宜去為諸苾芻払

拭鞋履」即既奉教而作。  
諸苾芻不許。仏言「汝

等、勿遮。欲令此人除  
去業障、其兩句法、汝

等應教」時諸苾芻、令  
払鞋履、教兩句法。愚

路精勤常誦此法、積功

掃除し始めた。かれに、その修行僧たちは  
〔二句の学習を〕課さなかった。

世尊は言われた。

「課してやりなさい。『この者には、行為の除去がなされねばならない』と〔考えて〕二句の学習をわたしは課している。課してやりなさい」かれは、修行僧たちのサンダルを、初めから次々に掃除した。かれにたいし、その修行僧たちは、二句の学習を課した。

かれがこの二句を学習しているうちに、程なくして、うまく唱えられるようになった。そこで、尊者パンタカは、夜の明けるところに、このように思った。『世尊は、〈わたしは塵をとり除く〉〈わたしは垢をとり除く〉と、このように言われた。世尊は、いったい、内なる塵について言われたのだろうか、それとも、外なる塵に〔ついて言われたのだろうか〕』と。かれはこのように考えていたが、そのとき、以前に聞いたことがない三つの詩がここに浮かんだ。

『ここでは、塵 (rajas) は貪欲 (rāga) のことであって、土くれ (reṇu) のことではない。この塵は貪欲の異称であって、土くれの〔異称〕ではない。

この塵を除去するのは、賢者たちであって、善く逝ける人 (ブツダ) の教説において放逸である者たちではない』

不已，遂得通利。時愚路苾芻，便於後夜時，作如是念『世尊令我誦兩句法〈我払塵，我除垢〉者，此之字句，其義云何。塵垢有二，一内二外。此之法言，為表於内，為表外耶。為是直詮，為是密說』作是思惟，忽然啓悟。善根發起，業障消除。曾所不学三妙伽他，即於此時，從心顯現。

『此塵是欲非土塵  
密說此欲為土塵  
智者能除此欲染  
非は無慚放逸人』

『此塵是瞋非土塵  
密說此瞋為土塵  
智者能除此瞋恚  
非是无慚放逸人』

『此塵是癡非土塵  
密說此癡為土塵  
智者能除此癡毒  
非是无慚放逸人』<sup>4)</sup>

爾時愚路憶此頌義，如理修行，蠲除三毒，勤

『ここでは、塵はいかり (dveṣa) のことであって、土くれのことではない。この塵はいかりの異称であって、土くれの〔異称〕ではない。

[432] この塵を除去するのは、賢者たちであって、善く逝ける人の教説において放逸である者たちではない』

『ここでは、塵は迷妄 (moha) のことであって、土くれのことではない。この塵は迷妄の異称であって、土くれの〔異称〕ではない。

この塵を除去するのは、賢者たちであって、善く逝ける人の教説において放逸である者たちではない』<sup>4)</sup>

かれは、努力し、精励し、精進することによって、すべての煩惱を除滅し、聖者の最高位を証得して、最高位の聖者になった。三界の欲望を捨て、土塊と黄金を同じものと見なし、虚空と掌とに平等なところをいだし、斧と梅檀は同様であると考え、宇宙をひき裂くような知識をもち、知識と神通力と障りのない理解表現力を獲得し、現世の利得と貪欲と名誉に背を向け、インドラ神を初めとする神々に尊敬され、供養され、敬礼されるべきものとなった。

[そして、] 瞑想に入って坐しているところを、尊者マハーパンタカに見られた。[と

勇無怠，断諸煩惱，於  
須臾頃，證阿羅漢果，  
平等運心，愛憎無二，  
破無明殼，永出樊籠，  
釈梵諸天尊重供養。広  
説如上。

即於其処，跏趺未起，  
大路因行，見其端坐。

ころで、} ころを集中することなしには、最高位の聖者たちの真理にたいする洞察力（jñānadarśana 知見）は起動しない。

かれは、そ〔のマハーパンタカ〕に腕をつかまえ〔られ〕、言われた。

「さあ、まず、学習しなさい。それからあとで、瞑想しなさい」

そのとき、尊者パンタカは、すべての煩惱を除滅して聖者の最高位を証得しており、象の鼻のような〔つかまれていた〕腕を伸びるがままにした。尊者マハーパンタカは、顔をうしろに向け、まじまじと見た。かれは言った。

「尊者パンタカよ、ほんとうに、おまえは、そのように多くのすぐれた特質を獲得したのか」

「獲得しました」

尊者パンタカがすべての煩惱を除滅して聖者の最高位を証得したと〔聞いたと〕き、異教徒たちは軽蔑し、抗弁し、悪しざまに言った。

「沙門ガウタマは、『わたくしの教えは深遠で、深遠な輝きを有し、見難く、難解で、思量を離れたものであり、思量の及ぶところではなく、微細で、鋭敏で賢明な智者によって感得されるべきものである』と、このように言った。ここで、いま、かれのもとでパンタカを初めとする、愚かな、この上なく愚かな、鈍く、この上なく鈍い者たちが出家して

然阿羅漢，若不觀察，智見不生。乃牽其臂，喚云「具壽，且起習誦，然後思惟」愚路苾芻，見兄慈悲引臂喚起，不離於座，長舒其手如象王鼻，隨逐而去。大路迴顧，見希有已，問言「具壽，汝能證會此殊勝德」愚路默念無對。時彼愚路苾芻得勝果已。諸外道輩共起譏嫌「沙門喬答摩自云『我證甚深妙法，難知難悟，非思量者之所能測，大聰智人方能解了』者，斯誠妄說。何以故。今此愚路，至愚極愚至鈍極鈍，尚能證入。何甚深耶」世尊知已，作如是念『我此弟子德若妙高，云何諸人皆起嫌謗。今者，宜應顯揚其德』爾時世尊，告阿難陀，曰「汝今往勅愚路令教授苾芻尼」時阿難陀，奉仏教已，詣愚路所，告

いる。そのような者の〔教えが〕 どうして深遠であるのか」

世尊は考察された。『スメール〔山〕のような偉大な弟子ならば、大勢の人々は要認する。この者にもすぐれた特質があることを明らかにする必要がある』と。

そこで、世尊は尊者アーナンダに告げられた。

「さあ、アーナンダよ、パンタカに、『あなたが女性修行僧たちを指導しなさい』と言いなさい」

「承知しました、尊師よ」と、尊者アーナンダは世尊に応答して、尊者パンタカのところに行った。行って、尊者パンタカに次のように言った。

「尊者パンタカよ、師は『あなたが女性修行僧たちを指導しなさい』と、このように言われた」

尊者パンタカは言った。

「なぜ、多くの長老の修行僧たちを措いて、世尊は、わたしに女性修行僧の指導を命じられたのでしょうか。わたしにも、ほんとうは、『すぐれた特質があることを明らかにしなければならぬ』というのが師の意図でありましょう。それをわたしは満足させることにしましょう」

〔さて、〕女性修行僧で意欲的な者たち<sup>\*\*</sup>(?)が

言「具寿、大師有命『令具寿教授苾芻尼』」愚路聞已、便作是念『何意世尊捨諸耆宿大徳苾芻、令我教授苾芻尼衆。意欲令我自彰勝徳。今我宜応満大師意』

時有苾芻尼、来入寺

いた。〔パンタカのいる〕ジェータ林にやって来たかの女たちは、修行僧たちに尋ねた。

「世尊は、どなたを、わたしたちの指導者に命じられたのですか」

かれらは言った。

「尊者パンタカです」

かの女たちは言った。

「みなさん、ごらんなさい。女性がみくびられているではありませんか。あの人は、三カ月かかって一つの詩を学びましたが、それさえも唱えられるようになりませんでした。〔この〕女性修行僧たちは、三蔵を知り、教えを語り、自在な弁説の才があります。〔そのような〕女性たちを、かれが指導することになる、ということです」

かの女たちが〔自分たちの女性修行僧の〕集会に戻って来たところ、〔他の〕女性修行僧たちが尋ねた。

「みなさん、どなたがわたしたちを指導しに来られるのですか」

かの女たちは言った。

「聖いパンタカです」

「聖いマハーパンタカですか」

「その人ではありません。もうひとりの、愚かな、パンタカです」

〔いつも悶着を起こす〕十二人組〔の女性修行僧たち〕が〔そのことを〕聞いた。

中、請教授師、問授事  
苾芻曰「聖者、誰為我等作教授師」報言「具壽愚路」彼尼聞已、自相告曰「仁可觀諸大德輕蔑女人。此之苾芻、於三月中、不持一頌。

云何欲遣教授諸尼。然彼諸尼、有閑三藏、弁才無礙、是大法師。如何令彼來相教授。〔我等試當就禮其足〕至已致敬、白云「何遮利耶存念、王園寺苾芻尼衆畔睇逝多林苾芻僧足、奉問『大德、少病少惱、起居輕利、安樂行不』今令我等請教授師」愚路答曰「奧窣迦」彼尼聞已、自相告曰「此亦解道『奧窣迦』」即辭而去、至尼寺中。諸尼問曰「姉妹、誰當欲來教授我等」報言「是聖者愚路」

時十二衆苾芻尼、聞斯說已、共相告曰「仁



〔かの女たちは〕大いに軽蔑した。

「〔433〕 みなさん、ごらんなさい。女性がみくびられているのですよ。あの人には、三カ月かかって一つの詩を学びましたが、それさえもうまく唱えられるようになりませんでした。この女性修行僧たちは、三蔵を知り、教えを語り、自在な弁説の才があります。こ〔のような女性修行僧たち〕を、どうして、かれが指導するといえるのでしょうか」

かの女たちは言った。

「みなさん、〔わたしたちのうち〕六人は十二腕尺あるつる草でライオンの〔坐るような大きくて立派な〕座をみつらえ、六人はシュラーヴァスティーに入って、車道や街路や四辻や交差路〔など大勢の人々がいるところ〕で告げ知らせることにしましょう。『わたしたちの指導者として、しかじかの人々が来られます。わたしたちのために〔説かれる〕簡明な真理を見ることがないなら、そのために輪廻のなかに長くとどまることになるにちがいありません』と。そうすれば、だれであれ学ぶところが少い捨て子〔のような人〕は、女性修行僧たちを指導しようとはしません」

かの女たちのうち六人は、十二腕尺あるつる草でライオンの座をみつらえ、六人の女性修行僧はシュラーヴァスティーに入って、車道や街路や四辻や交差路で、告げ知らせた。

等觀諸大徳輕蔑女人。彼苾芻，於三月中，不持一頌。云何欲遣教授諸尼」広説如上。遂相告曰「姉妹，我等六人当敷師子座高十二肘。六人当往室羅伐城，於諸聚落衢路之所，遍相告令諸人当知『明日，王園寺有大法師，弁説無滯，来教授諸尼，説殊勝法。若能聽者，当得見諦，於生死内，不復輪廻』如是諸人来聽其法，愚路苾芻若当默然無有酬对，大衆嗤笑。由此縁故，令説愚者不復更来教授尼衆」作是議已，六人数設高座。六人遍告坊城。随所思惟，咸皆作了。爾時愚路，於日初分，著衣持鉢，入室羅伐城，次行乞食。既得食已，還至本処，飯食訖，収衣鉢，洗足已，旋入房中，繫念而住。至日晡後，從

「わたしたちの指導者として、しかじかの人が来られます。わたしたちのために〔説かれる〕簡明な真理を見ないならば、そのために輪廻のなかに長くとどまることになるにちがいありません」

〔さて、〕尊者パンタカは、午前、下衣を着け、衣鉢をたずさえて、シュラーヴァステイーへ乞食に入った。

食事のあと、托鉢から戻ると、衣鉢を片付け、両足を洗い、僧院に黙想のために入って行った。

尊者パンタカは、夕方、黙想からさめると大衣をたずさえ、ひとりの修行僧を随行させ、外出した。

〔そこには〕無量百千の人々がいて、ある者たちは好奇心をいだき、ある者たちは以前の善い報いをもたらす業因によって〔道心がおきるように〕刺激されていた。その会衆は尊者パンタカを遠方から見つけた。見つけて、さらに、互いに尋ねた。

「ここで女性修行僧を指導するのは、どちらの方だろうか。前に行く沙門だろうか、それとも後に行く沙門だろうか」

そこで、ある者たちが言った。

「前に行く沙門です」

かれらは、軽蔑し始めた。

「みなさい、みなさん。わたしたちは、〔十

禪定起、將一苾芻，詣王園寺。

時彼寺内有無量百千大衆雲集。或有先世善根之所警覺，或有現緣共相啓悟。時彼大衆見具壽愚路從遠而來，共相問曰「兩人俱至，誰是法師」有人告曰「前是法師」時諸大衆，各生輕賤，作如是語「諸苾芻尼，故心惱我。此之愚路，於三月內，一頌不持，豈能教授為我說法」有作是

二人組の）女性修行僧たちに故意に傷つけられたのです。あの者は、三カ月かかって一つの詩を学んだのに、それさえもうまく唱えられるようにならなかった。そのような者が、女性修行僧たちを指導したり、教えを説いたりできるのだろうか。さあ、帰ろう」

「わたしたちは待つことにする。もし、かれが教えを説くならば、聞くことにしよう」

そこで、『帰らない』ということで、その会衆はおさまった。

尊者パンタカは、ライオンの座があつらえられてあるのを見た。見て、考えた。『いったい、〔これは〕浄信をいただいた女性〔修行僧〕たちによってあつらえられたのか、それとも、〔わたしの〕損傷を意図する女性〔修行僧〕たちによってなのか』と。見たところ、損傷を意図する女性〔修行僧〕たちによるものであった。尊者パンタカは、象の鼻のような腕をのばして、そのライオンの座を〔除け〕、適当なところに置いた。尊者パンタカは、そ〔のあと〕に、坐った。かれが坐っていると、ある者たちには見え、ある者たちには見えなかった。そこで、尊者パンタカは、そ〔の場〕に相應しいところの統一に入った。ところが統一されると、自らの座から姿を消して、東方の上空にあがり、前述のように、神変を現わしてから神力をおさめ、あつらえられたもと

説「我等且觀。若能說法，當可聽之。若故相調弄，起去非損，去亦非晚」諸人咸坐，共觀得失。是時具壽愚路見師子座高，便作是念『為相調弄，為敬重耶』觀知相惱無心恭敬。時具壽愚路，便舒右手如象王鼻，按其高座，令使卑小，安詳就座。是時大衆処寬，不能普見。法師即便斂心入定。既入定已，隱身不現。即於東方，騰空而上，現四威儀，身出水火，作十八變。南西北方，亦復如是。現神通已，還居本座，告諸苾芻尼曰「我於三月，受一伽他。汝等樂欲聞其義不。假令我於七日七夜於一字句分別其義，亦未能盡」即便為說伽他之義。「『身語意業不造惡』者，仏説『不令有情造諸惡業』【所謂身造三

の座に坐った。坐って、尊者パンタカは、その女性修行僧たちに告げた。

「みなさん、わたしは、三カ月かかって一つの詩を学びました。〔その〕一つの詩の意義を、べつの句や文字で詳細に説明し、〔それを〕聞くためには、七日七夜耐えなければなりません。

『こころによって、ことばによって、身体によって、あらゆる世界で、いかなる悪をもなすべきではない。

諸欲を離れ、正しく思念し、正しく観察するならば、そのような人は、不利益をとまなう苦しみを見出すことはない』

と、〔434〕世尊は、あらゆる悪業の原因を説かれました。……」

〔かれが〕詩の意義について按じているあいだに、一万二千人が〔聖なる四つの〕真理を看取した。ある者たちは〔聖者の〕流れに入った位（預流果）を証得した。ある者たちは〔迷いの生存に〕一度だけ戻る位（一來果）を〔証得した。〕ある者たちは〔迷いの生存に〕再び戻らない位（不還果）を〔証得した。〕ある者たちは、出家してあらゆる煩惱を除滅し、聖者の最高の位（阿羅漢果）を証得した。ある者たちは、教えを聞いてさとりを得る人（声聞）のさとりに決意をひき起こした。ある者たちは、ひとりでさとる人（独

悪、殺盗邪婬。語為四罪，妄語離間語麤惡語綺雜語。意作三罪，貪瞋邪見。此等諸罪，世尊不欲令諸有情随心造作」如是半頌，善為譬喻]

説未了時，衆中一万二千有情，【皆悉遠塵離垢，得法眼淨】明見真諦。【或得煖法，或得頂忍，或世第一法】或得預流一來不還。或有出家證阿羅漢果。或有發趣聲聞菩提，或獨覺菩提，或無上菩提。是時大衆咸悉歸依佛法僧寶，歎未曾有。爾時具壽愚路，既為諸人，

覚)のさとりへの〔決意をひき起こした。〕ある者たちは、無上の正しいさとりへの決意をひき起こした。ほとんどすべて、その会衆は、ブツダに傾倒し、教えに傾注し、教団に傾斜し〔て、帰依するものとなっ〕た。

そこで、尊者パンタカは、この会衆を、教えにかなった話で教示し、教導し、激励し、歡喜させてから、座から立ち上がり、去って行った。

修行僧たちは、かれが戻って来るところを見つけた。かれらは考えた。『きょう、パンタカによって、大勢の人々が満足させられたのだろうか』と。かれらは、尊者パンタカに、面と向かって好ましからざることを尋ねることができなかつた。かれらは、隨行の沙門に尋ねた。

「尊者よ、きょう、尊者パンタカによって大勢の人々が満足させられなかつたのか、それとも、満足させられたのか」

「尊者のみなさん、だれひとり満足させられなかつた人はいません。世尊は、ヴァーラーナシー〔郊外〕にあるリシヴァダナ（仙人墮処）のムリガダーヴァ（鹿野苑）で、〔それぞれに〕三段階と〔合わせて〕十二の様態〔の認識の仕方〕がある〔四つの聖なる真理の〕教えの輪を回転させられましたが、それを、きょう、尊者パンタカが続いて回転させたのです。詩の意義を詳細に説明しないうち

宣說法要、示教利喜已、從座而去。〔苾芻尼衆歡喜奉行。時十二衆苾芻尼、不遂所懷、默赧無說〕

時六衆等、遙見愚路從外而來、各作是念『今日愚路令衆多人不生敬信』六衆不能對面言告、但問從者苾芻曰「愚路今日令幾人衆生不信耶」答曰「唯有希奇、曾無一人心生不信。然仏世尊、於婆羅痾斯施鹿林所、為人天衆、三轉法輪。愚路今時更復隨轉、乃至半頌伽他說猶未了、令諸大衆 獲果無辺 趣三菩提 歸向三寶」是時愚路、便詣仏所、礼仏雙足、在一面坐。爾時世尊、告諸苾芻曰「汝諸苾芻、於我聲聞

「愚かなパンタカ」伝承考（一）（関）

に、一万二千人が〔四つの聖なる〕真理を看取しました」

そこで、世尊は修行僧たちに告げられた。

「修行僧たちよ、〔煩惱からの〕こころの離脱にたくみな、わが修行僧たち、わが弟子たちのなかで、第一の者は、この修行僧パンタカである」

修行僧たちは、ブツダ・世尊に尋ねた。

「ごらんになってください、尊師よ、十二人組〔の悶着ずきの女性修行僧たち〕は、尊者パンタカに、『不利益になることをしよう』と〔考えながら〕かえって利益になることをしてしました」

世尊は言われた。

「修行僧たちよ、いまだけのことではなく、過去世においても、やはり、この女性たちは、『不利益になることをしよう』と〔考えながら〕かえって利益になることをしたことがある。そのことを聞きなさい」〔434<sup>16</sup>〕（以下、過去世物語）

弟子之中、心善解脱者、愚路是」

〔798上<sup>22</sup>-中<sup>21</sup>〕

〔798中<sup>21-27</sup>〕時諸

苾芻咸皆有疑，欲請世尊断除疑惑，白仏言「世尊，以何因縁，有十二衆苾芻尼。又十二衆苾芻尼，何故 欲与具寿愚路作無利事，反成大益。唯願世尊為説因縁」世尊告曰「汝等苾芻，非但今日 欲作無利 反成大益。乃往古昔，斯等諸尼，欲作無利，反招利益。汝等應聽」

\* 底本には ānandam (p.431, l.17) とあるが、Tib. : lam pa la (55.5.2), 漢訳及び文脈により panthakam に訂正。

\*\* 底本は bhikṣuṇyas chandahānisaḥ (p.432, l.26)。Tib : dge sloṅ ma gso sbyoṅ ḥbul ba gñis [rgyal byed kyis tshal du ḥoṅs te] (56.2.8) 及び漢訳の相当箇所からは Skt. 原文を推定することができない。

「愚かなパンタカ」伝承考 (一) (関)

1) (p.428, ll.25 - 26)

sarve kṣayāntā nicayāḥ patanāntāḥ samucchrayāḥ,  
saṃyogā viprayogāntā manaṅāntaṃ ca jīvitam.

この詩はp.17, ll.6 - 7; p.63, ll.16 - 17にも出る。また, *Mvu.* III, pp.152, 183; *Udānav.* G.I.21; 『大毘婆沙論』卷180 (『大正蔵』27卷, 902頁上) など, 仏典の諸処に散在する。(水野弘元『法句経の研究』271, 396頁参照)

『法句経』卷上 (『大正蔵』卷4, 559頁上)

常者皆尽 高者亦墮  
合会有離 生者有死

cf. *Peking Ed.*, 43/54.2.8 - 3.1

bsags pa kun gyi mthaḥ zad ciñ,  
mthon po rnam mi mthaḥ ltuñ ḥgyur,  
phreñ paḥi mthaḥ na ḥbral ba ste,  
gson poḥi mthaḥ ni ḥchi ba yin.

2) (p.430, ll.8 - 11)

pāpaṃ na kuryān manasā na vācā  
kāyena vā kiṃcana sarvaloke,  
riktaḥ kāmaiḥ smṛtimān saṃprajānan  
duḥkhaṃ na sa vidyād anarthopasaṃhitam.

cf. *Peking Ed.*, 43/55.2.3 - 4

lus ṅag yid kyis sdig pa mi bya shiñ,  
ḥjig rten kun la yoñs ḥdsin ḥdod bral ba,  
dran dañ ldan shiñ śes bshin can gyis ni,  
gnod ldan sdug bsñal gañ yin bsñen mi bya.

パーリ所伝では, これとは別の詩が与えられたことになっている。

(*Jātaka* I, p.116, ll.12 - 15)

padumaṃ yathā kokanadaṃ sugandhaṃ  
pāto siyā phullam avītagandhaṃ,  
aṅgīrasam passa virocamaṇaṃ  
tapantam ādiccam iv antalikkhe.

3) (p.431, ll.9 - 10)

yo bālo bālabhāvena paṇḍitas tatra tena saḥ,  
bālaḥ paṇḍitamānī tu sa vai bāla ihocyate.

cf. *Peking Ed.*, 43/55.4.3

byis pas bstod pa gañ yin dañ,  
mkhas pas smod pa gañ yin pa,  
ḥdir ni mkhas smod mchog yin gyi,  
byis pas bstod pa ma yin no.

cf. *Dhammapada*, G. 63.

yo bālo maññati bālyam  
paṇḍito vā pi tena so,  
bālo ca paṇḍitamānī  
sa ve bālo ti vuccati.

この『ダンマパダ』の詩に関して若干の考察がある。中村元『原始仏教の生活倫理』294 - 298頁，同『普遍思想』（上）420頁参照。

4) (pp.431, l.26 - 432, l.6)

rajo tra na hi reṇur eṣa  
rajo rāgasyādhivacanaṃ na reṇoḥ,  
etad rajaḥ prativinudanti paṇḍitā  
na ye pramattāḥ sugatasya śāsane.  
rajo tra dveṣo na hi reṇur eṣa  
rajo dveṣasyādhivacanaṃ na reṇoḥ,  
etad rajaḥ prativinudanti paṇḍitā  
na ye pramattāḥ sugatasya śāsane.  
rajo tra moho na hi reṇur eṣa  
rajo mohasyādhivacanaṃ na reṇoḥ,  
etad rajaḥ prativinudanti paṇḍitā  
na ye pramattāḥ sugatasya śāsane.

cf. *Peking Ed.*, 43/55.5.7 - 56.1.1

rdul ḥdir ḥdod chags de ni sa rdul min,  
rdul ni ḥdod chags miñ ste rdul gyi min,  
mkhas pa gañ gis rdul de rnam spañs pa,



「愚かなパンタカ」伝承考 (一) (関)

de dag bde gśegs bstan la bag yod ḥgyur.  
rdul ḥdir śe sdañ de ni sa rdul min,  
rdul ni śe sdañ miñ ste rdul gyi min,  
mkhas pa gañ gis rdul de rnam spañs pa,  
de dag bde gśegs bstan la bag yod ḥgyur.  
rdul ḥdir gti mug de ni sa rdul min,  
rdul ni gti mug miñ ste rdul gyi min,  
mkhas pa gañ gis rdul de rnam spañs pa,  
de dag bde gśegs bstan la bag yod ḥgyur.

(*Jataka* I, pp.117 l.30 - 118, l.5)

rāgo rajo na ca pana reṇu vuccati  
rāgass etaṃ adhivacanaṃ rajo ti,  
etaṃ rajaṃ vippajahitvā bhikkhavo  
viharanti te vigatarajassa sāsane.  
doso rajo - pe - .  
moho rajo na ca pana renu vuccati  
mohass etaṃ adhivacanaṃ rajo ti,  
etaṃ rajaṃ vippajahitvā bhikkhavo  
viharanti te vigatarajassa sāsane.

(昭和58年度駒大北海道教養部・岩見沢駒沢短大学術研究助成による成果の一部)